

## 序 文

この第9巻では、目と頭脳のテクニックをまとめました。目のテクニックと言えば、ミスディレクションを働かせるときの目の使い方、また演技として観客に訴えかけるための使い方、などは語られることがありましたが、ダブルリフトやエルムズレイカウントのような技法と同じように、不思議を生み出すためのテクニックとして、深く追求されたものは見あたりません。

エスティメーションについては、エドワード・マルローの専門書がありますが、これは枚数を推定する方法論中心に書かれており、それによって様々な不思議現象を生み出す方向への掘り下げはされていません。しかしながら当巻をまとめてみて、個別には、エスティメーションを使った作品がこれだけあったのか、と驚かされました。

グリンプスにいたっては、方法論さえ十分に追求されてきませんでした。“デッキを相手から受け取るときに、密かにボトムカードをグリンプスする”などと、簡単に説明しているものがほとんどですが、この技法は下手なやり方をしたら、ボトムをのぞいたのが相手から丸見えになってしまいます。演技者には自分の目の動きが見えませんが、相手からはマジシャンの目の動きはよく見えているからです。

そしてグリンプスという技法が、キーカードを認知したり、選ばれたカードを密かに認知したりするだけでなく、様々な現象を生み出せる技法であることも、当巻によって知っていただけるはずです。

ピンキーカウントという、両手でデッキを持ち、小指の先でカードを弾いて密かにカードの枚数を数えるという難しいテクニックがあります。どんなにうまくやってもカウントしている最中は両手が固まった状態になります。サイレントカウントをマスターすれば、作品の脈絡の中で、まったく気配を感じさせることなく、カードの枚数を密かに数えることができます。

目のテクニック以外にも、記憶などの頭脳プレイについても解説いたしました。当巻はカーディシャンにとっての武器であるテクニックの範囲を、大きく広げるのに役立つと確信いたします。

2011年11月7日

加藤 英夫